

## ティーチング・ポートフォリオ

大学名：大手前大学 所属：現代社会学部 名前：谷村 要 作成日：2025年12月15日

### 1. 教育の責任

大手前大学現代社会学部のカリキュラム・ポリシーで示されている「国内外の社会現象を教育研究の対象とし、現代社会の諸課題を発見・理解できる基礎力を備え、社会で活躍できる人材」を「養成」することを踏まえながら、私自身の専門領域（情報社会学、メディア・コミュニケーション研究、ファン文化研究）に関連した以下の教育実践を進めています。

- (1) 課題の発見・理解のための土台となる社会学およびメディア・コミュニケーション研究、ファン文化研究の理論についての教授
- (2) 現代社会の具体的事象（特に情報メディアが社会に及ぼす影響）を踏まえた課題の提示
- (3) 社会事象の諸課題をとらえるための社会調査法の実践と指導
- (4) 自ら発見した現代社会の課題を踏まえた論文（レポート）の指導

2025年度に指導した科目は以下の通りです。

【通学課程】 ※2025年12月15日時点

| 授業科目名               | 科目区分                                   | レベルナンバー | 履修人数 |
|---------------------|--|---------|------|
| 卒業研究                | コアカリキュラム科目                             | 400     | 5    |
| メディア学入門             | メディア・社会学専攻選択科目<br>メディア・コミュニケーション専攻選択科目 | 100     | 146  |
| メディア・コンテンツと地域       | メディア・社会学専攻選択科目                         | 200     | 50   |
| 出版メディア論             | メディア・社会学専攻選択科目<br>メディア・コミュニケーション専攻選択科目 | 200     | 166  |
| デジタルメディア論           | メディア・社会学専攻選択科目<br>メディア・コミュニケーション専攻必修科目 | 300     | 60   |
| メディアデザイン演習          | メディア・コミュニケーション専攻必修科目                   | 400     | 3    |
| メディア・社会デザイン演習 I     | メディア・社会学専攻選択科目                         | 300     | 12   |
| メディア・社会デザイン演習 II    | メディア・社会学専攻選択科目                         | 300     | 10   |
| 地域貢献 PBL (京丹後 2025) | 総合科目 (キャリアアップ科目)                       | 200     | 2    |

【現代社会学部通信教育課程】 ※2025年12月15日時点

| 授業科目名         | 授業方法   | レベルナンバー | 履修人数 |
|---------------|--------|---------|------|
| ジャパノロジー入門     | 通信教育   | 100     | 527人 |
| 調査研究方法 I      | 通信教育   | 200     | 187人 |
| 地域デザイン演習      | スクーリング | 300     | 12人  |
| 特別演習 I (聖地巡礼) | スクーリング | 100     | 20人  |

【大学院比較文化研究科】

- ・ 博士課程前期課程のゼミ（「比較文化特別研究 I [研究指導]」、「比較文化特別研究 II [研究指導]」）では 5 名、研究生 4 名を指導。博士課程後期課程のゼミ（「比較文化特別研究 [研究指導]」）では 1 名を指導。
- ・ 他に「文化・社会特殊研究 I」を担当（履修人数：11 名）。

## 2. 教育の理念

多くの研究者がそうであるように、自分自身と社会をよりよい方向に向かわせるために学問はあると、私は考えています。私の専門は、情報社会学とファン文化研究ですが、では、この学問はどのように社会をよい方向に向かわせる効果があるといえるのでしょうか。

メディア研究の考え方では、情報技術（情報メディア）はただの道具や表現手段ではありません。人間社会は、技術に影響されて考え方や社会そのものを変えていくからです。たとえば、スマートフォンが普及するまでは「ながらスマホ」という言葉はありませんでしたし、駅の構内アナウンスで注意をうながすこともありませんでした。スマートフォンが普及したことで、歩きながらスマートフォンに夢中になる人が増えたから、そのような言葉がつくられ、アナウンスがされるようになったのです。「何を当たり前のことを言っているのか」と思いかもかもしれませんが、これは新しい技術が登場したこと社会の形が変わった一つの事例です。この「ながらスマホ」が問題化されるようになったことで、それまで勤勉の象徴として学校に置かれていた「薪を背負って（仕事をしながら）本を読む二宮金次郎」が「ながらスマホ」を助長させるものとして問題になるようになりました。ここから言えることは、人びとは技術によって感覚や考えを変えていき、それにあわせて社会の形（社会にとって「よい」とされるもの）も変えるということです。このように、現代社会ではさまざまな新しい技術が開発され、普及していくことによって日々その社会の形を変えつつあります。情報メディアの持つ影響力を理解していくための力を身につけることは、社会で起こっている新たな「変化」を見つける「武器」になります。この「武器」があれば、いち早く社会の「変化」にあわせた政策の提案やビジネスチャンスの獲得ができます。それは自分のためにもなりますし、社会の発展にも寄与します。これが“自分自身と社会をよりよい方向に向かわせる”ための学問のあり方です。

一方で、情報技術の発展は、また従来はメディア作品（マンガ・アニメ・ドラマ・アイドル等）の消費者とみなされていたファンの姿も変えつつあります。ご存じのように、ファンはただ作品を消費するだけでなく、現在ではSNS等で作品の解釈等を発信しファン同士で交流して、空間を超えてファンの輪を広げています。インターネットが普及する前は、ファンの声はバラバラでしたが、今は結びつくようになったことで、ファンの声を作品の作り手側は無視できなくなっています。ファンが以前より強い力を持ったのです。このことを踏まえて、現在では、ファン文化の実態を対象とする研究がさかんになっています。ファンの動向を把握することはビジネスにつながりますし、新しい作品づくりのヒントになります。またファンが応援する対象を「推す」ことで得られる幸福感を研究することで、困難さを多く抱えた現代社会を生きる人々の助けになるヒントをそこから得られるかもしれません。このような形でファンを研究することも“自分自身と社会をよりよい方向に向かわせる”ことにつながります。

私は、以上のような考えを踏まえながら、「聖地巡礼」とそれにかかわる人びと（ファン・地域・事業者・コンテンツ権利者）をテーマにした研究を進めています。アニメ・マンガ等のポップカルチャーと縁のある場所を巡る「聖地巡礼」においては、その場所の意味がファンの実践によって塗り替わっていく状況があります。そのとき、ファンはどう行動するか。そこに住まう地域住民はどう対応するか。「お客さん」を獲得できる可能性が広がる事業者はどう動くか。コンテンツ権利者の反応はどうか。このようなテーマに取り組み、聖地巡礼のメカニズムの図式化をめざしています。2024年度からは科学研究費・基盤研究（C）にも採択されていますので（課題名「コンテンツツーリズムの「集合知」を形成する「解釈共同体」の実態調査研究」）、その調査実践・成果を活かした教育活動を推進していきます。

この学問分野の意義を念頭に、自らの研究にもとづく具体的な成果や醍醐味を学生に伝え、社会課題への問題意識の涵養や調査実践、地域活性化実践等に積極的に関与してゆく姿勢を涵養します。これらの教育活動を通じて、社会課題へのユニークな視点を獲得し、社会学や社会調査法等の学問的知見を“自分自身と社会をよりよい方向に向かわせる”ために活用できる能力を育てます。

## 3. 教育の方法

社会をとらえるためのユニークな視点の獲得と、社会学や社会調査法等の学問的知見を社会で活用するための能力を育成するために、以下の方法をとります。

## ティーチング・ポートフォリオ

大学名：大手前大学 所属：現代社会学部 名前：谷村 要 作成日：2025年12月15日

1. 学生が関心を持ちやすいような事例を授業内や課題で取り上げ、社会学では「こんなことも研究対象になる」ことを気づかせる（「学ぶ」）
2. 社会学やファン研究の先行研究の知見を活かして、具体的な事例を分析する方法を伝え、課題で分析のための実践経験を積ませる（「考える」）
3. クラス内で自らの見解を他者に伝える（アウトプットする）経験を積ませる（「伝える」）
4. 教員がコーディネートした実社会と接する域学連携活動や調査活動、学内イベント等に、学生に参加してもらう（「参加する」）

私は「教育は折にふれて」ということばを自らの教育方法の方針としています。このことばは、ドラマ化もされたマンガ『鈴木先生』第1話で示されたものですが、「教育はさまざまな機会の中で施すもの」という意味として理解しています。このことばを実践してゆくためにはさまざまな機会（「折」）を学生に与えてゆく仕組みづくりが必要だと考えます。ですので、上記「学ぶ」「考える」「伝える」「参加する」という機会をできる限り用意して、学生に成長するための機会を創出するように、工夫しています。

具体的には、授業内でポップカルチャーや時事的な話題や学生にとって身近な話題を取り上げ、その話題と学問的知見を結び付ける学びを展開し、課題等で学生が考える機会をつくります。また、文章や口頭で言語化する機会をつくり（グループワークやクラス内発表、el-Campus のディスカッション機能や課題レポート機能を活用）、他者に自分の考えを伝える機会をつくります。さらに、授業内で培った能力を活用するための実社会と接続させた活動（たとえば、京丹後市での域学連携事業や、西宮市や沼津市のような私の研究フィールドでの調査実践等）に参加する機会も用意しています。

### 4. 教育の成果

これまでの教育実践の中では、学生に、調査成果を学会大会（第15回情報コミュニケーション学会全国大会）等で発表してもらったり、地域のPRのためのパンフレットや映像の制作やご当地キャラクター（京丹後七姫）のデザイン創出に関わってもらったりしてきました（根拠資料1）。



根拠資料1 学生がデザインした京丹後七姫ラッピングバス（左）、第15回情報コミュニケーション学会全国大会での学生の調査成果報告の様子（右）

また、2025年11月には大学生・大学院生有志とともに、兵庫県立西宮苦楽園高校（兵庫県立西宮高校）で開催された「北高・オープンハイスクール」（苦楽園高校がアニメ化されたライトノベル作品『涼宮ハルヒの憂鬱』の登場人物が通う高校のモデルであることを活用したイベント）に協力し、スタッフとして活動するとともに、来場者アンケート調査等を実施しました（根拠資料2）。この調査の成果は今後（2026年以降に）学外で報告する予定です。

## ティーチング・ポートフォリオ

大学名：大手前大学 所属：現代社会学部 名前：谷村 要 作成日：2025年12月15日



根拠資料 2 2025年11月23日に開催された「北高・オープンハイスクール」の様子

このような活動に参加することを通じて、学生は教員の創造を超える成長をとげることがあります。その成長を見ることが教員として最大の喜びです。

### 5. 改善への努力と今後の目標

授業運営上における課題は、授業で取り扱う内容が多いため、どうしても情報詰め込み気味の授業を展開していること、学外での活動に参加することによる学生負担の大きさ（それによる学外活動への参加者減少）である。どのようなバランスで授業を展開すべきか、「3. 教育の方法」で示した方針を踏まえながら調整していきます。

そのために、まずは履修者に授業の目的を丁寧に説明するとともに、授業内容を精査して、さらなるスクラップ&ビルドを進めるつもりです。

### 【添付資料】

- ・ LMS (el-Campus) や Teams での配布資料
- ・ 谷村要 (2017) 「地域とかかわる PBL への試み ～京丹後市域学連携事業での活動を事例として～」『大手前大学 CELL 教育論集』7 巻 : 31-37
- ・ 「アニメ聖地巡礼を活用した地域活性化：静岡県沼津市・奥駿河湾海浜祭の事例から」（第 15 回情報コミュニケーション学会全国大会）<https://cis.gr.jp/2021/zenkoku.html>